

## キャッシュフロー計算書

### 1.キャッシュフロー経営の必然性

公開企業は、2000年3月期からキャッシュフロー計算書の作成が義務付けられています。非公開企業は、キャッシュフロー計算書を作成する義務はないものの、キャッシュフロー重視の経営が必要なことは、公開企業と何ら変わりはありません。

キャッシュフローとは、いわゆる「資金」のことです。周知のように「勘定合って銭足らず」とか、「黒字倒産」の言葉がある通り、利益と資金は一致しません。利益はあくまで中間の成果であり、投下資本の回収という意味で本当の成果はキャッシュです。

### 2.利益とキャッシュフローの関係

利益＝収益－費用→実現主義、発生主義

キャッシュフロー＝収入－支出→現金主義

※「実現主義の考え方」…売上の計上時期は、売買契約書を交わした時や商品を納入したときなど、「売上の事実が発生したとき」です。

実際に売上代金を受け取っているかどうかは、実現主義では関係ない。(具体例参照)

### 3.キャッシュフロー計算書とは

キャッシュフロー計算書というのは、「実際のお金の流れで会社の実態を表す財務諸表」です。キャッシュフロー計算書には、営業活動によるキャッシュフロー(営業CF)、投資活動によるキャッシュフロー(投資CF)、財務活動によるキャッシュフロー(財務CF)の3つに分けられます。(CF…キャッシュフロー)

これらの計算書を読み解くことで、お金がしっかりまわっているかどうかという倒産リスクを見極めたり、会計期間の始めと終わりでどれくらいお金の流れに変化があったのか?など読み取ることができ、会社のお金の状態がわかります。(実際のキャッシュフロー計算書参照)

#### ■ 営業活動によるキャッシュフロー(営業 CF)

営業CFとは、本業による収入と支出の差額を表します。つまり、本業を行った結果に、手元のお金がいくら増えたか(…あるいは減ったか)がわかる項目です。この項目の合計額がプラスの会社は、本業が順調に行っている証拠となります。逆にマイナスの会社は、本業で苦戦しており、現金不足で苦しんでいることがわかります。営業CFのマイナスが続く会社は、少し危険な会社と見てもいいでしょう。

#### ■ 投資活動によるキャッシュフロー(投資 CF)

投資CFとは、固定資産や株、債券などの取得や売却をした時の現金の流れを表します。通常、営業活動を行っていくためには、設備投資などの固定資産への投資が必要なため、優良企業は、この項目はマイナスであることが多いです。(お金を使った場合は、マイナスの表記となります。) 逆にプラスの場合は、会社が持っている設備や、株、債券などを売った金額が投資分を上回っていることを示しています。

#### ■ 財務活動によるキャッシュフロー(財務 CF)

財務CFとは、キャッシュ(お金)の不足分をどう補ったのかを表します。株主に配当を支払ったり、自社株買いをしたり、借金を返済した場合は、マイナスになります。逆に借入金や社債などで資金調達すればプラスになります。

優良企業は、この項目はマイナスであることが多いですが、経営難にもかかわらず、金融機関に返済を迫られてやむなくマイナスとなることもあるようです。また、積極的に成長を目指す企業は、借入金などの資金調達も多くなりがちでプラスになることがあります。

#### ■ 現金同等物

これは、『現金及び現金同等物の増減』を表しています。前の期と比べてプラスになっていれば金回りが順調で、経営状態もよいと言えるでしょう。

(損益計算書とキャッシュフロー計算書の関係 具体例)

例1. 4月1日 現金仕入 6,300円

4月1日 現金売上 10,500円

(損益計算書)売上 10,500円-仕入 6,300円 税引前当期純利益 4,200円

(キャッシュフロー計算書)税引前当期純利益 4,200円

現金残高 4,200円

例2. 4月1日 現金仕入 6,300円

4月1日 掛売上 10,500円

(損益計算書)売上 10,500円-仕入 6,300円 税引前当期純利益 4,200円

(キャッシュフロー計算書)税引前当期純利益 4,200円

売上債権の増加額  $\Delta$ 10,500円

現金残高  $\Delta$ 6,300円

例3. 4月1日 掛仕入 6,300円

4月1日 現金売上 10,500円

(損益計算書)売上 10,500円-仕入 6,300円 税引前当期純利益 4,200円

(キャッシュフロー計算書)税引前当期純利益 4,200円

仕入債務の減少額 +6,300円

現金残高 10,500円

例4. 4月1日 掛仕入 6,300円

4月1日 掛売上 10,500円

(損益計算書)売上 10,500円-仕入 6,300円 税引前当期純利益 4,200円

(キャッシュフロー計算書)税引前当期純利益 4,200円

売上債権の増加額  $\Delta$ 10,500円

仕入債務の減少額 +6,300円

現金残高 0円

※4つの例のように、損益計算書上は同じ4,200円の純利益でも、キャッシュフロー計算書に表すと、最大10,500円→最少 $\Delta$ 6,300円まで、16,800円現金差異が生じる。

## ※非資金損益項目

- 減価償却費・・・減価償却費は実際に資金流出のあった費用ではないので、これを当期純利益にプラスする。
- 貸倒引当金の増加額・・・減価償却費同様、実際に資金流出のあった費用ではないので、これを当期純利益にプラスする。

## ※損益項目の調整

- 営業外収益(受取利息及び受取配当金など)  
営業外費用(支払利息、固定資産売却損など)  
・・・営業利益に戻すため、P/Lの営業利益以下で足し引きした、営業外収益・費用、特別利益・損失を収益・利益はマイナス、費用・損失はプラスで営業利益に戻す。

## ※営業活動に係る資産・負債の増減

- 売上債権の増加額(売掛金、受取手形など)  
・・・仕訳でいうと、「売掛金/売上」「現金/売掛金」となり、売掛金が増加するということは、売上は増えているが、現金は回収できていないことを意味するため、キャッシュフロー計算書上では、増加＝マイナスする。
- 棚卸資産の増加額  
・・・売上債権同様、棚卸資産は販売してはじめて現金が回収されることとなるため、棚卸資産の増加はマイナスする。
- 仕入債務の増加額(買掛金、未払費用など)  
・・・仕訳でいうと、「仕入/買掛金」「買掛金/現金」となり、買掛金が増加するということは、支払うべきお金がまだ支払われず、会社内に留保されていることを意味するため、キャッシュフロー計算書上では、増加＝プラス、減少＝マイナスする。
- 次の損益項目と税額は、営業外収益・費用、特別利益・損失のうち、実際に受取ったり、支払った金額を収益・利益＝プラス、費用、損失＝マイナスで記載します。  
また、法人税等の支払額は、仕訳でいうと、前期確定分は、「未払法人税等/現金」となり、損益上に影響されていないため、ここでマイナスします。

■ キャッシュ・フロー計算書を見る際のポイント

( 単位 : 千円 )

<b>I 営業活動によるキャッシュ・フロー</b>			
税引前当期純利益	300 →	ポイント1	税引前当期純利益を確保できているか 減価償却費等の非資金損益項目による CFへの影響はどの程度か？
減価償却費	47 →	ポイント2	
貸倒引当金の増加額	5		
受取利息及び受取配当金	△ 1		
支払利息	4		
有形固定資産売却損	6		
売上債権の増加額	△ 5 →	ポイント3	営業活動に係る資産・負債の増減で 大幅な資金流出は起きていないか？
棚卸資産の増加額	△ 73		
仕入債務の減少額	△ 7		
小計	276 →	ポイント4	本業でどれだけの資金を確保しているか？
利息及び配当金の受取額	1		
利息の支払額	△ 4		
損害賠償金の支払額	△ 10		
法人税等の支払額	△ 76		
営業活動によるキャッシュ・フロー	187 →	ポイント5	支払利息や法人税の支払を含めた 本業の収支で資金を確保しているか？
<b>II 投資活動によるキャッシュ・フロー</b>			
有形固定資産の取得による支出	△ 90 →	ポイント6	将来に向けた投資が行われているか？
有形固定資産の売却による収入	16		
投資有価証券の取得による支出	△ 9		
投資有価証券の売却による収入	6		
貸付による支出	△ 3		
貸付金の回収による収入	4		
投資活動によるキャッシュ・フロー	-76 →	ポイント7	将来に向けた投資額が営業活動による キャッシュフローで賄えているか？
<b>III 財務活動によるキャッシュ・フロー</b>			
短期借入による収入	20		
短期借入金の返済による支出	△ 46		
長期借入による収入	50		
長期借入金の返済による支出	△ 10		
株式の発行による収入	20		
配当金の支払額	△ 12		
財務活動によるキャッシュ・フロー	22 →	ポイント8	営業活動、投資活動の状況を踏まえた 適切な資金調達や返済が行われているか？
<b>IV 現金及び現金同等物による換算差額</b>			
	0		
<b>V 現金及び現金同等物の増加額</b>			
	133		
<b>VI 現金及び現金同等物の期首残高</b>			
	146		
<b>VII 現金及び現金同等物の期末残高</b>			
	279		